〔千葉医学　92：73～74，2016〕

〔編集後記〕

千葉医学雑誌の第92巻２号をお届けいたします。本号では症例報告２編，話題１編，病院紹介１編，学会紹介１編，オープンアクセスペーパー（OAP）要旨２編，英文原著１編，英文の千葉医学会賞受賞論文１編と盛り沢山です。

一つ目の〔症例〕は飯野高之先生たちによる「Upside down stomachを呈した巨大食道裂孔ヘルニアに対し腹腔鏡下修復術を施行いた１例」というタイトルです。我国では欧米諸国とは異なり，手術治療を必要とする重症例の食道裂孔ヘルニアは比較的少なかったそうですが，高齢化と食生活の欧米化に伴い増加傾向にあるとの事です。ここでは著者らが経験したUpside down stomachを呈した巨大食道裂孔に対する腹腔鏡下修復術の１例を紹介しており，極めて興味深い内容となっています。

二つ目の〔症例〕は天海博之先生たちによる「粘液性嚢胞腫瘍との鑑別が困難であった非機能性膵神経内分泌腫瘍の１例」というタイトルです。膵神経内分泌腫瘍（PENT）は稀な疾患であるそうですが，近年は増加傾向にあるそうです。ここでは著者らが経験した嚢胞を形成し粘液性嚢胞腫瘍（MCN）との鑑別が困難であった非機能性PENTの１例を紹介しており，これも極めて貴重な内容となっております。

〔話題〕は庄司竜麻先生たちによる「「グローバルヘルス」への千葉大学の取り組み－日独共同集中講義（ベルリン）・国際機関研修（ジュネーブ）に参加して－」というタイトルです。昨今のエボラ出血熱等の蔓延をきっかけにグローバルヘルス（国際保健）に対する関心が特に高まっており，多国間での連携と医療分野に政治・経済学等を加えた多分野の協力を組み合わせた新しいアプローチが必要とされているそうです。ここでは千葉大学予防医学センターの取り組みが紹介されており，大変興味深い内容となっております。

今回から始まった〔病院紹介〕は「独立行政法人国立病院機構千葉医療センター」で，同センターの増田政久先生が紹介して下さっております。国立病院機構は３つの業務（医療の提供，臨床研究の推進，医療従事者の養成）を行っており，我国有数の病院ネットワークを有しているそうです。ここでは千葉市中央区椿森にあります「千葉医療センター」を詳しく紹介して下さっております。

〔学会〕には臓器制御外科学談話会での42題の抄録が掲載されています。臨床の最前線において今何が緊急の課題なのか，その課題にどのようなアプローチを試みているのか等，多くの先生たちの研究に取組む真摯な様子が感じられて，極めて貴重な内容となっております。

〔OAP要旨〕は鈴木崇根先生たちによる「振動刺激は表在性の痛みを減弱する～実験的研究」というタイトルです。これは英文原著「Vibratory stimulation reduces superficial somatic pain of the finger: an experimental study」の日本語要旨です。英文原著の方も合わせてご覧下さい。ここではこれまで一定の見解が得られていない振動による疼痛刺激減弱効果を，様々な創意工夫により，明らかにしたという素晴らしい論文です。著者らのチャレンジに敬意を表したいと思います。

〔OAP要旨〕の二つ目は渡邉栄三先生たちによる第７回千葉医学会賞の受賞論文で，「敗血症におけるプログラム細胞死－敵か味方か－」というタイトルです。英文論文「Programmed Cell Death in Sepsis－Determining Whether it is a Friend or Foe－」も合わせてご覧下さい。ここでは病勢や病期によっては諸刃の剣になる，type Ⅰとtype Ⅱのプログラム細胞死と呼ばれるapoptosisとautophagyの敗血症病態への関与が解説されており，これらのプログラム細胞死の制御により敗血症治療への可能性を探った極めて価値の有る最先端の研究です。

〔編集後記〕は今回，野田公俊が担当いたしました。千葉医学雑誌の編集委員会では，編集委員長を平成11年１月から昨年末の平成27年12月まで17年間担当しておりました。この間，５年前の第87巻１号から千葉医学雑誌のサイズをより見やすいようにする目的で，B5判からA4判に変更しま

した。これに伴い表紙のデザインも，これまでの千葉医学雑誌のシンボルカラーである臙脂色を基調に残しつつ，千葉大学医学部に縁のあるものを配置した現在の新しいものを導入しました。また，内容も日本語と英語のハイブリッドスタイルに進化して今日の千葉医学雑誌/CHIBA MEDICAL JOURNALに至っております。ジャンルの充実化も計っており，今回の〔病院紹介〕の開始もその一つであります。今後，新編集委員長の瀧口正樹教授のもと編集委員は一丸となって千葉医学雑誌の発展に取組む所存です。会員の皆様にはなお一層のご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。

（編集委員　野田公俊）